

特別授業 マニユエル・ヤン氏講演会

「一九六〇年代アメリカの
カウンターカルチャー運動とボブ・ディラン」

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 山本 明代



二〇一四年六月二六日の五時限に特別授業としてマニユエル・ヤン氏の講演会を滝子キャンパス一号館二〇一教室において開催した。ヤン氏はアメリカ合衆国カリフォルニア州ウエストコピナ市在住の研究者、思想家である。ブラジルのカンピナスで日系と台湾系の両親の間に生まれ、一九八一年まで日本の学校に通っている。テキサス大学卒業後、オハイオ州にあるトレド大学の大西洋民衆史家ピーター・ラインボーのもとで歴史学を学び、吉本隆明によるカール・マルクス論に関する博士論文で博士号を取得した。近年、日本のカルチュラル・スタディーズ研究者との共同研究を行い、日米をフィールドとして数多くの著作を発表している。

ら、ボブ・ディランとアメリカの一九六〇年代のカウンターカルチャー運動、そして同時代の公民権運動の展開との関連性について語っていただいた。ヤン氏は英語、日本語ともに堪能であるため、前半部分を英語で、後半は英語を交えながら、日本語での講演となった。アメリカ社会史の筆者のゼミの学生を中心に、学部生と教員、市民が参加し、少人数ながらも充実した会となった。以下、講演の内容を紹介したい。

ヤン氏はブラジルで生まれた後、神戸で高校に通い、テキサス大学でイギリスの歴史家E・P・トムソンについて学び、大学院でラインボーに師事し、民衆史に取り組んだ経緯を語った。ボブ・ディランは、一九四一年にミネソタ州ダールズで、ロバート・アレン・ジーマンとして生まれる。その年の一二月には真珠湾攻撃があった。戦争の記憶はボブ・ディランにも刻まれていたに違いない。

一九六八年にはアメリカ合衆国だけでなく、東京でも、パリ、メキシコでも若者の運動が起こった。大学院で指導を受けたラインボー氏は、当時コロンビア大学の大学院生で「民主的社會を求める学生(SDS)」というアメリカ最大の学生組織の一員として、大学ストライキに参加した。一九六九年、ヴェトナム戦争が激化するなか、SDSを飛び出した学生がウエザーマンという地下組織を結成し、社会を変えようと過激な活動を行った。このウエザーマンという名称は、ボブ・ディランが一九六五年に発表した曲「サブタレニアン・ホームシック・ブルース」の一節「風向きを知るのに予報官(ウエザーマン)は要らない」から付けられた。このようにボブ・ディランは同時代の若者に影響を与えてきた。現在でも健在である。

り、生い立ちについて嘘八百を言い始める。一九五〇年代はアイゼンハワー大統領の時代で、アメリカは中産階級の画一的な社会を目標としていた。マッカーシーが赤狩りと呼ばれた反共運動を指揮し、労働組合も弾圧された。核戦争に備えて、核シェルターが作られ、人々は戦争の危機感に怯えた。そんな時代の空気を捉えて、ディランは一九六二年に「レット・ミー・ダイ・イン・マイ・フートステップス」を創作した。

一九五二年にハリー・スミスがアメリカの伝統的なフォークソングの収集や録音を始めると、学生たちがキャンパスや喫茶店でフォークソングを歌い始めた。ウディ・ガスリーは、家族の離散後、アメリカ中を放浪しながら、社会的な意識を持つようになる。ガスリーは、伝統的なフォークを編曲したフォークを歌い、ディランにも影響を与えた。当初、ディランは凡庸な歌手だったが、一九六一年にガスリーと出会う。ディランは三か月間ニューヨークに行った際に黒人やアイリッシュの音楽を知り、ミネソタに戻ってきた時には、才能あふれる歌手に変わっていた。ブルース歌手ロバート・ジョンソンのように、十字路で悪魔と

取引をしたかのようだった。

ディランはミネソタ大学を中退して、ニューヨークに転居し、アーティストとしての活動を始めた。一九六二年に最初のアルバムを出した。当時の歌手は、声、音楽がきれいで、編曲がちんとしていたというものが主流だったが、ディランはそうではなかった。しかし、ガスリーが行っていたことを引き継ぐという自覚を持って活動を続けた。

一九六四年にはアメリカで大きな歴史的な瞬間が訪れ、ディランもこの年に大ブレイクした。公民権運動の活動家がミシシッピ州で殺される事件があり、支援に向かったディランはそのことを歌った。そして、ワシントン大行進でジョン・バエズとともに歌い、わずかに二歳で反戦フォークの旗手となっていく。「第三次世界戦争」という歌ではキューバ危機、核戦争の脅威を歌った。ジョン・バーチという中国共産党に殺害されたパプティスト教会の宣教師の名前を付けた極右団体について歌った「トークインのジョン・バーチ・バラノイド・ブルース」を作る。そして、世界をどうとらえるのか、第三世界戦争が起こるのではないかとディランは歌った。社会学者

C・ライト・ミルズや社会活動家トム・ヘイドンの本を当時の学生はみな読んでおり、ディランの歌に共感した。

黒人霊歌を基に創作した「風に吹かれて」は、公民権運動のなかで様々な人に取り上げられて、間もなく大ヒットする。ある黒人ゴスペル歌手が私の父の歌ではないか、なぜ白人の青年が歌うのかと語ったというが、この歌の内容は百年前の時代ともつながっている。本当によい社会を作るのはいつか、その時は来ないかもしれないが、自分たちはその問題を抱えながら自問自答し続けるのだという内省的な歌である。

その後、ディランは観衆の気持ちを逆なでするような曲を作り続けた。二〇一二年のアメリカン・フットボールのスーパードラフト試合中継時のテレビ・コマーシャルにディランは出演している。それは、ドイツはビールをスイスは時計をアジアは携帯電話を作るが、アメリカは自動車を作るという自動車会社クライスラーのCMだった。クライスラーは労働環境が悪いことでも知られている。労働者をトイレにも行けないような状況で、安全装置を外した機械で働かせている会社である。

ボブ・ディランは、黒人霊歌やガスリーなど、いろんな人や場所から素材を取って来て自分の歌を作っている。それは剽窃というよりもフォークの伝統である。フランスでシチュアアシオニスト・インターナショナルを結成し、『スペクタクルの社会』という本を書いたギー・ドゥポールは、「剽窃は必要である。進歩はそれを必要とする」と言っている。剽窃は悪い言葉とみなされがちであるが、過去の時代のリスペクトする人物の言葉を自らの言葉に翻訳して、新しいものを創っていくことは悪いことではない。むしろそれが必要なのだ。

質疑応答では、一九六〇年代のアメリカの社会運動と世界各地での運動との影響関係や、ニューレフトの立場について質問があった。ヤン氏は、一つ目の質問に対して、アメリカのブラック・パンサー党の運動が大阪の釜ヶ崎の労働者の運動に与えた影響と、日本の砂川闘争で先住民出身のアメリカ軍兵士が砂川の人々との連帯を訴えた例を挙げて、アメリカからの影響は大きかったが、相互に影響があったと答えた。二つ目の質問については、ニューレフトは共産党というより、反共の社会状況

を問題としていたと回答した。そして、反戦運動に関して付言し、一九六五年のボストンで行われた学生の反戦デモは愛国主義的であったが、その後の反戦運動は戦争から帰った兵士たちが中心となり、黒人運動も大きな役割を果たしたと締めくくった。